

憲法の現在

OBA MJ 連載

《 憲法問題特別委員会だより 》

第66回

憲法市民講座「現代イスラーム論」報告

憲法問題特別委員会 副委員長 大槻 和夫

1 9.11同時多発テロ以降、いわゆる「イスラーム過激派」によるテロ行為とこれに対する「反テロ戦争」の連鎖が始まって既に15年が経過するも、未だに終息の気配を見せない。近時は、その余波が「反テロ戦争」の一方の当事者であるヨーロッパ諸国にも及び、ヨーロッパ諸国は国内におけるテロの頻発、中東の戦火から逃れてきた大量の難民の流入、これらの問題に対する反発としてのイスラームフォビア（イスラーム憎悪）や排外主義的極右の台頭など、事は冷戦終結後の世界秩序を形成していた欧米流自由民主主義体制をも揺るがしかねない事態にまで至っている。

このような、世界を揺るがす安全保障上の問題、ひいては、歴史の転換点をも予感させる事態を的確に理解するためには、その起動力となっている「イスラーム過激派」、ひいては、「イスラーム」一般についての知識が欠かせない。しかし、中東から遠く離れ、最近までムスリムと接触することも少なかった日本では、イスラームに対する知識は表面的、断片的なものにとどまっているのが現状

であろう。

このような問題意識から、憲法問題特別委員会では、憲法市民講座の一環として、小杉泰京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授をお招きし、「現代イスラーム論」と題して講演をいただいた。参加者は86名に及び、高校生の参加者も得て、盛況であった。

小杉教授は、「イスラームとは何か」（講談社現代新書）、「9.11以後のイスラーム政治」（岩波現代全書）、「イスラーム帝国のジハード」（講談社学術文庫）他多数の著作があるイスラーム研究の第一人者であり、講演では、その該博な知識を踏まえて、イスラームの初歩から丁寧な解説をいただいた。以下では、そのさわりを紹介する。

2 「アッサラーム・アライクム」（平安があなたたちの上にありますように）という挨拶が通じる地域がイスラーム圏である。

シリアでは、国民の約3分の1が国内外の難民と化すという悲惨な内戦が続いている。



石油・天然ガスの半分を産出していること、地政学的に欧米の大国が介入する浸透度の高い地域であること、これら欧米諸国は現地の独裁、君主制政権を支えており、これに対する反発から民主化が進むとイスラーム復興勢力が伸長し、これを嫌ってイスラーム化を潰すとそれへの反発として過激派が勃興してくる。要するに、イスラームは潰すには強すぎ、かといって欧米と対等に張り合うには弱すぎる。

1948年の第一次中東戦争以降、中東の動乱は果てしなく続き、現地の子供達は平和=戦争のない状態というのを知らないし、想像もできない。

現在、世界の人口の約4分の1の17億人がムスリムである。G20にもインドネシア、トルコ、サウジアラビアの3か国が参加しているが、国連では力がない。

「キリスト教対イスラーム」という図式は欧米の考え方で、例えば東南アジアではキリスト教の勢力が弱いので、上のような図式は現実感がない。

現在、イスラーム経済の中心地は南アジア、東南アジアである。

楽天的な社会であり、自殺はほとんどない。若年人口が多い。

イスラームというと、戒律が厳しいというイメージがあるが、例えば、「酒と豚は駄目」というのは「大いに食べてよい」が前提にあり、「但し、酒と豚は駄目」ということ。「利子を取ってはいけない」というのも、「大いに儲けてよい。但し、利子は取るな」ということ。ラマダン（断食）も、日が沈んだら「すみやかに食べる」という意味が裏にあるので、日没後の宴会は壮大。

イスラームの根本教義は①「アッラーのほかには神なし」と②「ムハンマドはアッラーの使徒なり」の二つの信仰告白。①はユダヤ教、キリスト教と同一だが、②によってイスラームの独自性が成立する。これに対して、仏教を一言でまとめられる言葉というものはない。

「イスラーム」とは「絶対帰依」の意味。

イスラームは共同体性の強い宗教で、「神をどういう形で信仰するかは自分個人のことだから放っておいてくれ（内心の自由）」といった考えは成り

立たない。

イスラームはムハンマドを「模範」とする宗教。そのムハンマドとは、血統がよく、誠実（アミーン）であり、良き家庭人であり、商業に従事し、預言者・宗教指導者であり、立法者であり、仲裁者であり、外交官であり、戦略家・戦士であった。こ

うしたムハンマドを模範とするイスラームからは、どうして宗教と政治を分けないといけないのか分からないということになる。

聖書が本（the book）であるのに対し、クルアーン（コーラン）とは、「誦まれるもの」という意味。暗唱して朗読する聖典であり、従って、イスラームの歴史では盲目の学者が多くいた。文字ではなく音中心なので、アラビア語から翻訳したものはクルアーンではないということになる。

現在、世界で最も急速に人口を増やしている世界宗教はイスラーム。

近代化との関係では、イスラーム復興は、近代化したからイスラーム（豊かになっても宗教を捨ててはアイデンティティが喪失する）という側面と、近代化に取り残されたからイスラームという側面と、両面がある。

過激派はイスラーム全体からみれば少数派だが、その中で過激な若者によるイスラームの乗っ取りが進んでいる。

イスラーム過激派は、イスラーム初期に現れた「ハワーリジュ派」の再来。

スンナ派とシーア派に信仰簡条の差は殆どない。現在のスンナ派-シーア派の争いは政治上利権上の争い。

現在はドローン（無人機）やイスラームフォビア（イスラーム嫌い）とテロ行為の悪循環になっている。相互理解（非イスラームの側からはイスラーム理解）が何よりも大切。

